

2012年 5月10日(木)

夕刊

読売新聞

遭難死6人、防寒着使えず 低体温症判断鈍る？

長野県の北アルプス、白馬岳(2932メートル)付近で北九州市の医師ら6人が遭難死した事故で、軽装で見つかった一行は防寒着や簡易テントを持参していた事が、地元山岳関係者らへの取材で分かった

6人はシャツの上にジャンパーや雨具を着た状態で吹雪の中、折角の装備を生かせないまま低体温症に陥ったと見られる。

専門家「早めの重ね着を」

6人は63歳～78歳で海外での登山経験者もいた。

地元の山岳遭難防止対策協会の隊員が7日、現場でリュック4つを回収したところ、薄手の羽毛ジャケットや下着、食料などが入っていた。

近くに手袋も残され簡易テントが強風で飛ばされた状態だったという。

6人と同じ山域に4日、別ルートで入山した大西浩、県山岳協会理事長(52歳)によると午前10時過ぎまでは青空が広がり汗ばむほどだったが約30分後に雨が降り始め、正午頃から雪に変わり吹雪になった。

予定を変更し、スキーで下山した大西理事長は「天候が悪化した時点で引き返すべきだったのではないかと話す。

装備について

遭対協の降旗義道、救助隊長(64)はもう1着、セーターやフリースも必要だった。

もっと早く防寒着を着るべきで吹雪のなかでリュックから取り出す体力が残っていなかったのではないかと話している。

低体温症に詳しい北海道苫小牧東病院副院長の舟木上総医師(56)によると中高年者は低体温下でも十分に血管が収縮せず、筋肉のおとろえから熱を生み出す機能も落ち、低体温症に陥りやすい。

今回の遭難について舟木医師は「吹雪で急激に低体温症重症化し、判断能力を失ったのではないかと

と推測。

体の震えや歩くペースが極端に遅くなるなどした場合、早めに重ね着し、登山を中止する判断が必要だとしている。

日本山岳ガイド協会の磯野剛太理事長(58)は「中高年登山者は体力や環境変化への

判断力、対応力が衰えており、体力の限界を把握しておくことが大切だ。

若い人が1日かけるくらいのルートを2日かけるくらいのゆとりが欲しい」と説明する。